

「映像のまち・かわさき」推進フォーラムでは3つの事業を推進しています。

今回はその中から「人材育成事業」をご紹介しますと思います。

「人材育成事業」では、小学校の授業での映像制作を通じて、コミュニケーション能力を育むことや、映像を読み解く力を子供たちに身に着けさせるために、小学校の授業を支援しています。



「小学校映像制作授業」が始まったのは2007年。

現在は、川中島小学校で、こどもたちが台本を考えたオリジナル映像の制作を行っています。

その他に、京町小学校・東門前小学校ではもう少し短めの学校紹介映像を作っています。

この3校にはプロの映画監督である土持幸三監督が講師に、キネマハウスを拠点に活動していたシニアの映像サークル、「かわさきキネマサークル」がサポートボランティアとして携わり、この授業を支えています。

私は学校と講師・ボランティアさんを繋ぐ役目をしています。



映像の基礎講座・・・わかりやすい映像とは何か？の講義、何を作るかの企画、絵コンテ制作です。講師の土持監督は、最初の授業で必ず駅の『引き』の写真を見せます。

そして「この場所がわかる人いますか？」と子どもたちに問います。

子どもたちは口々に駅名を言いますが、正解は出ません。

次に駅の『アップ』の写真を見せます。

すると、そこには駅の名前が書いてある看板が出ていて、子どもたちは正解を言います。

でも、監督は引きの写真でもどこの写真かわかると言います。

それは、監督が住んでいる駅だからです。

「僕は毎日通っているからすぐわかるけど、君たちは行ったことがないからわからない。

だから、映像を作るときはみんなわかるだろうと思って作っちゃダメなんだ。

みんなの作品を見る人の中には、この学校のことを全然知らない人もいるかもしれない。

その人にもここがどこかがわかるように、アップとルーズ（引き）の映像を両方撮って、交互に見せることがわかりやすい映像を作ることなんだよ。」

このことを聞いた子どもたちはちゃんとアップとルーズを撮るようになり、作品のクオリティがグンと上がりました。

皆様も映像を撮る際には是非試してみてください！



カメラ操作を学び、こどもたちは各班に分かれて、ビデオカメラや三脚を持って教室を飛び出します！
一見簡単そうに見えますが、グループで1つの作品を作るのは意外と大変です。
カメラの使い方が難しい・・・という技術的なところではなく、チームワークがとても大事。
班員全員が同じ方向を向き、同じゴールを見ていないと時間内には終わりません。
つまりは、よい作品には仕上がらないのです。
こどもたちは直感的にそれを感じ、楽しみながらも、自然とお互いの意見をすり合わせて、時間内に進めていくことを覚えていきます。
そういった成長を感じられるところが、この取り組みが定着している証拠です。



ある学校でのエピソードですが、編集授業の際に“撮影した映像が足りない！”という緊急事態が起こった時、普段の学習ではあまり発言をしない子が、「あの時こんな映像を撮ったから、それを使えば大丈夫！」と積極的に発言したそうです。

それを見た担任の先生が「学校の授業では引き出せないものが引き出せた」と、とても驚いていました。

また、保護者の方からは「家に帰ってきて、今日は撮影をして楽しかったとか映像授業の話をたくさんしてくれるので、よほど楽しいのだと思います。」という感想もいただいたことがあります。



今年度は中学校でも長期映像制作授業が実施されました。玉川中学校です。

夏休みを挟んで約3か月で、3つの班に分かれて映画を作って発表しました。

1～3年生が学年関係なく班に分かれるため、はじめは緊張感が漂っていましたが、最後の感想では、「学年を超えて意見を言い合えたことがよかった。」と何人も話してくれました。

こうしてコミュニケーション力がついていくのですね。

現在、川崎市内の小・中学校では短期間の映像制作授業・ワークショップも含めて年10件以上行われていて、現在も問合せはどんどん増えています！

メディア社会を生きる力を身に付ける。

今後も、「映像のまち・かわさき」の「映像制作授業」にご期待ください！

注)2017年に掲載をされたJVCケンウッド株式会社HP「エブリオな人たち」より抜粋